

「アジアの高校生による聞き書きプロジェクト」における コミュニケーション能力の測定について

農業科 石井 克佳

2009年からNPO法人「共存の森ネットワーク」の協力を得て、授業の中で小川町での聞き書き調査を始めた。「聞き書き」とは、農林水産業や伝統工芸に携わる名人から聞き取り、記録することである。

学校での聞き書きを始めて、この4年間で81名の生徒が参加するとともに、2012年は生徒5名がインドネシアの高校を訪問した。聞き書きを通じた交流を行い、生徒のコミュニケーションスキルの変化をアンケート調査で調べた。1回目の結果を日本の高校生とインドネシアの高校生で比較すると、自己統制、表現力、自己主張、他者受容で差があった。2回目の結果を比較すると、自己統制、表現力、自己主張で差があった。しかし、2回目では他者受容にグループによる差がなくなったのは、特記すべきことである。

キーワード：持続発展教育 聞き書き コミュニケーション能力 NPOとの連携 国際交流

1. はじめに

筑波大学附属坂戸高等学校（以下坂戸高校と略す）では7年前の2005年から、生徒が「聞き書き甲子園」に参加している。この間、参加生徒は森や川や海の名人を聞き書きすることで名人と向き合い、名人の技や伝統に感動し、聞き書きレポートを仕上げながら充実した活動を行ってきた。「聞き書き甲子園」に参加した後も、校内では卒業研究で聞き書きを続けたり、校外では論文コンクールに応募したり、卒業後もめざましく活躍している者がいる。彼らの参加後の感想は、「参加してよかった」「もっと多くの人に経験してほしい」という声が多い。そこで2009年からはNPO法人「共存の森ネットワーク」（以下共存の森と略す）の協力を得て、環境科学分野2年次の授業の中で埼玉県小川町での聞き書き調査を始めるに至った。小川町は埼玉県の中央部よりやや西に位置し、面積は60.45km²、人口は33,191人（2013年1月現在）である。江戸時代より和紙、絹織物、建具、酒造等の伝統産業が隆盛し、近年は有機農業が盛んに行われている。環境科学分野の授業で学習している農林業や環境保全に携わる人々がいるとともに、持続可能な社会を形成するモデルとして、小川町が適していると判断した。学校での聞き書きを始めて、この4年間で81名の生徒が参加した。4年目の2012年は特別な年になった。海外の高校と聞き書きを通じた交流が可能になったのである。その初めの交流先として、坂戸高校の姉妹校であるインドネシア・ボゴール農科大学附属コルニタ高校（以下コルニタ高校と略す）が選ばれた。コルニタ高校の協力を

得て、坂戸高校で行っているものと同じプログラムを実施することが可能となった。共存の森では、国連大学の協力を得て、このプロジェクトに参加する高校生のために日本語版と英語版で同じ内容のテキストブックを作成した。また、生徒のコミュニケーション能力の測定と評価に関しては、附属学校教育局プロジェクト研究2「子どものコミュニケーション能力を育てる」（以下P2研究会と略す）が担当した。

今回インドネシア交流に参加する坂戸高校2年次5名は、この初めての試みを体験する生徒たちである。教科の学習を海外へ広げるプロジェクトは、さまざまな試行錯誤を経てよりよいものになっていく。何が起るのか、やってみなければわからないこともあるだろう。しかし、だからこそ、思いがけない体験が今まで味わったことのない感動を呼ぶかもしれない。日本とインドネシア双方で、農林業や環境保全に携わる名人を調査し、互いの文化や伝統に触れ、共通点に共感し、相違点に驚くことだろう。また、生徒たちは、調査を通して得た地域・産業・伝統・文化等への知識や体験をもとに、交流をし、成果を共有していくことになる。そうした活動の中で、コミュニケーション能力は、それらの活動の主要な役割を果たす。そんな思いを胸に、このプロジェクトは始まった。

(1)聞き書きとは

学校における「聞き書き」の授業は、本校が共存の森と連携して開発した環境教育プログラムである。農山漁村に暮らし、その土地に伝わる伝統的な技術を有する名人を高校生がインタビューし、レコーダーに記

録した音声を書き起こす。「聞き書き」という手法は、インタビューの内容を名人の話し言葉で書き上げていくものである。撮影した画像とともにレポート作成を通して、森や田畑などの自然の資源を理解し、人間生活と自然との接点を考えることを目的としている。本校では、3年前から環境科学の授業でこの取り組みを行っている。

「聞き書き」の利点は、いくつかある。まず、地域の農林業や環境保全を仕事としている人たちに直接インタビューすることで、地域の農林業や自然環境の姿を具体的に捉えることができる。また、インタビューを書き起こしまとめていく過程で、言語活動の充実が図られる。さらに、名人がその仕事を選んだ理由や仕事の中身を詳しく聞く過程で、生徒のキャリア意識も高まっていく。年齢がずっと上の名人と交流し、その結果をまとめ伝えていく過程は、生徒のコミュニケーション能力にもよい影響を及ぼすと考えられる。こうした利点から、2012年本校では環境科学に関する授業内で、埼玉県小川町の和紙、有機農業、竹細工の名人を訪ねインタビューを行なった。

新しい学習指導要領では、各教科・科目等の指導に当たっては、生徒の思考力・判断力・表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識・技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語活動の充実が必要であることが示されている。この言語活動とは、学校や家庭・地域において様々な事象や人々と触れ合う中で自己理解や他者理解を深め、自らの体験を言語化し、他者と協同したり議論する中で言語による分析、表現、記録していく活動である。このように、言語活動の充実とは言語によるコミュニケーション能力を必要とする活動を活発にし、あらゆる学習活動の根幹をなすものである。P2研究会では、「聞き書き」の活動を通じて、生徒の言語活動を充実させ、コミュニケーション能力にどのような影響を及ぼすことが可能であるかをテーマに設定し取り組んだ。

(2)坂戸高校での実施過程

坂戸高校での活動のねらいとして、次の5点があげられる。①夏季休業期間を中心に、調査活動にじっくり取り組む。②地域の自然環境に興味をもつ。③聞き書きにより、問題発見力、コミュニケーション能力を身につける。④名人への調査を通してキャリア意識の充実を図る。⑤新学習指導要領「言語活動」の実践を試みる。

1学期末である6月中旬に2日間事前学習を行った。共存の森から講師を迎え、①農山村に暮らし、仕事をしている人たちの暮らしをできるだけイメージするようにした。②調査先への挨拶や調査日の設定について

アドバイスを受けた。③準備作業として、所在地、交通手段、調査時に必要な用具を確認した。④質問項目を考え整理した。⑤インタビューの仕方について練習を行った。⑥調査後の作業として、テープに録音することと書き起こすことを学び、調査に臨んだ。その後、夏季休業中に調査日を設定し、小川町における聞き書き調査を実施した。調査後は録音したインタビューを書き起こし、2学期(9月)最初の授業で撮影した写真を選び、発表資料の作成にとりかかった。その後9月中旬の授業時に、発表会形式で各班の調査結果を報告し、日本語での資料を整えた。調査対象者とは初対面であり、しかも年齢が70歳台の方が多いため、生徒は緊張の中で調査を始めた。レコーダーを回し、写真を撮り、質問をしながら時間をかけていくうちに、次第に緊張がほぐれ、コミュニケーションを図ることができたようである。その様子は、生徒が発表資料として作成したポスターに調査時の感想として次のように書かれている。

- ①普通ではなかなか知ることが出来ない、和紙の原料からの作り方や和紙の可能性などいろいろなことが聞けて、より和紙に興味を持つことが出来た。和紙が衣装として、舞台などで使われていることにすごく驚いた。いつか、名人が望んでいるように和紙がいろいろなところで使われるようになり、需要が増えればいい。
- ②名人は、若い頃から苦勞を重ね、誇りを持って仕事をしていることがわかった。名人の周りにいる人たちは彼の技を評価し、すばらしいと思った。
- ③日常生活では会うことの出来ない名人と会い、話を聞くことが出来幸せだった。名人から学んだことを世界中の人々に伝えることができるとうれしい。

生徒は、聞き書きの授業を通してどのようなコミュニケーション能力を身につけるのであろうか。想定される場面は3つある。すなわち、①名人の調査を通して身につける異なった世代間のコミュニケーションでは、調査のアポイントメントをとり、名人に質問し、名人の話聞く。②同じ班内の生徒とのコミュニケーションでは、協力して記録(録音・撮影)し、書き起こし、レポート等にまとめる。③他の班の生徒とのコミュニケーションでは、それぞれの報告を共有する。このように、コミュニケーションを図る場面や相手が異なると、必要とされるスキルや能力にも特徴があらわれる。あらかじめそれらを分類すると、①異なった世代間のコミュニケーションでは、基本スキルとして読解力、対人スキルとして他者受容、②同じ班の生徒とのコミュニケーションでは、基本スキルとして自己統制力、対人スキルとして関係調整、③他の班の生徒とのコミュニケーションでは、基本スキルとして表現力、対人スキルとして自己主張が表れると想定した。(図1)

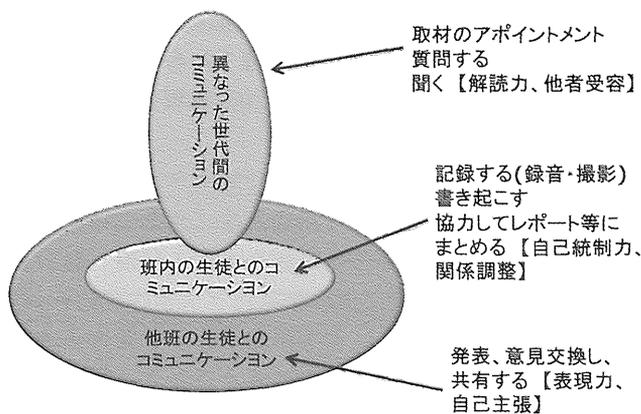


図1 聞き書きによる
コミュニケーション能力の獲得

(3) インドネシアでの授業実施

9月初旬に、本校教員と共存の森スタッフがコルニタ高校を3日間訪問した。日本から来た一行とコルニタ高校の教員が協力し、英語版のテキストを用いてインドネシア語の通訳を交えながら、「聞き書き」に関する事前学習、現地調査、まとめ方を指導した。このプログラムにコルニタ高校の2年生34名が参加した。コルニタ高校の生徒たちは、われわれ一行を歓迎してくれ、初めて経験する「聞き書き」の授業に興味を示してくれた。調査先は、インドネシアに伝わる伝統的な衣食住（鐘製作、人形製作、人力車、農業、竹細工、石組み、伝統菓子製作など）に関する技術を持つ名人が選ばれた。各グループ生徒4～5人で編成し、インタビューを行い、その成果をまとめた。

(4) 日本とインドネシアの高校生の交流

「聞き書き」の成果をアジア各国の高校生が相互に理解し広めていくためには、共通言語を設定し共有を図らなくてはならない。その準備として、本校生徒は英語のポスターを作成し、11月に筑波大学で開催された「国際農学ESDシンポジウム2012」に参加した。その後12月にインドネシアで交流会を実施した。両校のまとめが完成し、12月20日(木)から12月25日(火)まで、本校生徒5名と卒業生1名、教員2名ならびに共存の森スタッフ2名がインドネシアに渡航した。現地ではカウンターパートとしてJICA青年海外協力隊員1名がコルニタ高校生徒ならびに教員とともに待ち受ける中、12月22日に国立ボゴール農科大学水産学部講堂において交流会を実施した。当日はコルニタ高校保護者200名が見守る中、両国の高校生が調査を通して得た地域・産業・伝統・文化等の知見をもとに、英語ポスターの展示、英語によるプレゼンテーションを行い、成果を共有した。また、両国の伝統に関する紹介として、本校からは書道を学ぶ生徒が作品展示と毛筆の実演をし、インドネシアからは、伝統音楽の演奏や伝統

食が披露され、文化的な交流を深めることもできた。交流会の最後に坂戸高校主幹教諭石井克佳がまとめのスピーチをした。高校生が地域の農林業や環境保全に携わる人々への調査を通じて聞き書きを行い、地域の自然環境や伝統を見つめ、持続可能な社会、日本とインドネシア両国の未来、地球規模の環境問題を考える機会として活かしてほしいとアピールした。交流会の翌日は、雨期にもかかわらず好天に恵まれ、両校生徒20名でボゴール植物園を見学した。昨日の緊張した場面とは打って変わり、思い思いにグループに分かれ、会話し写真を撮りながら楽しく過ごすことができた。

2. 方法

(1) コミュニケーション能力に関する調査方法

P2研究会で検討した24の調査項目について、7件法でアンケート調査を実施した。アンケート調査の回答は、1(最も肯定的)から7(最も否定的)の中から一つ選ぶこととし、調査は下記の通り実施した。調査項目は、藤本・大坊(2007)の「大学生のためのコミュニケーションスキル尺度(ENDCORESモデル)」をもとに作成された。質問紙の構造は、基本スキルと対人スキルの2次元からなり、基本スキルは自己統制、表現力、解読力の3領域、対人スキルは自己主張、他者受容、関係調整の3領域が含まれている。

①予備調査として、2011年に坂戸高校の授業で「聞き書き調査」を体験した生徒32名(Aグループ)と「聞き書き調査」を体験していない生徒26名(Bグループ)を対象に1年後にアンケート調査を実施した。

②本調査として、2012年にコルニタ高校の授業で「聞き書き調査」を体験した生徒27名(Cグループ)と坂戸高校の授業で「聞き書き調査」を体験した生徒6名(Dグループ)を対象に上記のアンケート調査を実施した。なお、Cグループは9月に事前調査、12月に事後調査を実施した。Dグループの生徒のうち5名が12月にインドネシアに渡航したので、8月に事前調査、9月に事後調査1、12月に事後調査2を実施した。

3. 結果と考察

(1) コミュニケーション能力に関する調査結果

①予備調査

2011年に聞き書きを行った生徒(Aグループ)の平均値は、最低値3.59(解読力)、最高値4.4(自己主張)であった。同じ学年で聞き書きを行っていない生徒(Bグループ)の平均値は、最低値3.62(他者受容)、最高値4.61(自己主張)であった。(図2)

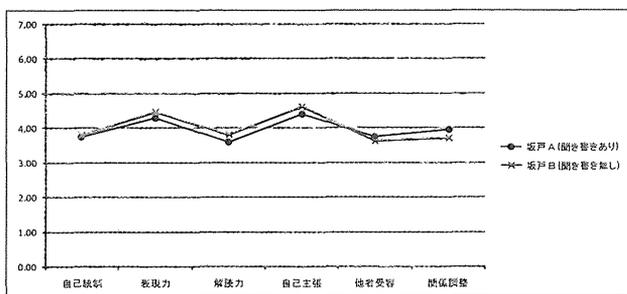


図2 坂戸A、坂戸B

2つグループを比較したところ、Aグループの方が表現力、解読力、自己主張において自己評価が肯定的で、他者受容、関係調整においてわずかに否定的だった。自己統制については顕著な差がみられなかった。

②本調査

Cグループ1回目（事前調査）の平均値は、最低値1.94（他者受容）、最高値2.58（自己主張）であった。2回目（事後調査）の平均値は、最低値2.21（他者受容）、最高値2.62（自己主張）であった。全体の傾向として自己評価が高いレベルで肯定的である。事後調査では、他者受容と関係調整において否定的な方向にシフトした。（図3）

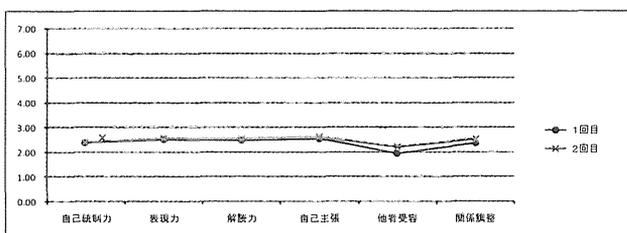


図3 インドネシアB 1回目、インドネシアB 2回目

Dグループ1回目（事前調査）の平均値は、最低値2.75（他者受容）、最高値3.96（表現力）であった。2回目（事後調査1）の平均値は、最低値3.04（他者受容）、最高値4.17（表現力）であった。3回目（事後調査2）の平均値は、最低値2.80（他者受容）、最高値3.90（表現力）であった。標本数が少ないため、一人の回答の変化が全体に大きく影響する。そのことを考慮しつつ、3回の調査の傾向をみると、わずかではあるが自己評価が肯定的傾向にシフトした。（図4）

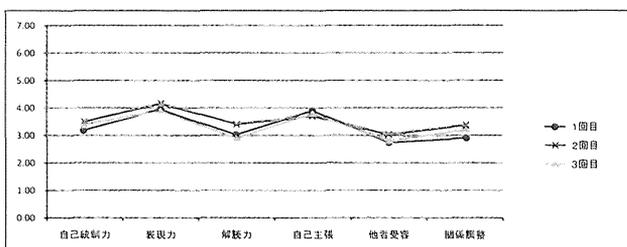


図4 坂戸Dグループ 1回目、2回目、3回目

3回目の標本数が5なので、1回目と2回目もこの5名のみで集計したところ、1回目（事前調査）の平

均値は、最低値3.10（他者受容）、最高値3.95（自己主張）であった。2回目（事後調査1）の平均値は、最低値3.30（他者受容）、最高値4.20（表現力）であった。（図5）

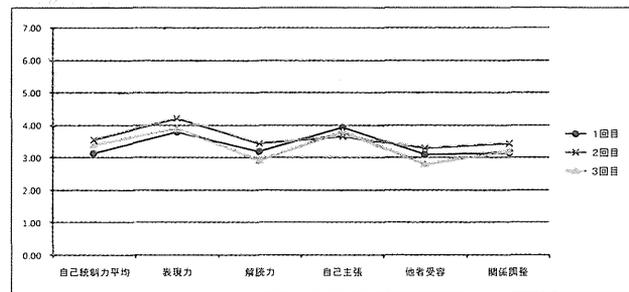


図5 坂戸Dグループ5名 1回目、2回目、3回目

(2)コミュニケーション能力に関する評価

授業の中で聞き書きを行う際、生徒のコミュニケーション能力はどのような場面で発揮されるのであろうか。それは、大きくは次の3つの段階に分かれると考えられる。

①異なった世代間のコミュニケーション

調査の相手である名人は、60歳台から90歳台の方たちである。生徒にとっては親よりもさらに上の世代の方たちに初めて会い、インタビューを行うのである。調査の依頼とアポイントメントをとるために電話をかける。調査当日は、さまざまな質問をするともに、名人の話聞く。アンケート調査では、「相手の意見や立場に共感する」「相手の意見をできるかぎり受け入れる」といった他者受容の能力と、「相手の考えを発言から適切に読み取る」「相手の感情や心理状態を敏感に感じ取る」といった解読力を質問した。

異なった世代間のコミュニケーションではコミュニケーション能力のうち、とくに他者受容と解読力を必要とする。

②同じ班の生徒とのコミュニケーション

生徒同士が協力して調査の記録をとる。録音や撮影などの役割分担を決める。録音した内容を書き起こす際、ポスター、プレゼンテーション、レポート等にまとめる際にも、同じ班の生徒同士でコミュニケーションをとりながら、協力して行わなければならない。アンケート調査では「自分の欲求をうまくコントロールする」「まわりの期待に応じた振る舞いをする」といった自己統制力と「人間関係を良好な状態に維持するように心がける」「意見が対立し、人間関係が悪化しても適切に対処する」といった関係調整能力を質問した。

同じ班の生徒とのコミュニケーションではコミュニケーション能力のうち、とくに自己統制力、関係調整力を必要とする。

③他の班の生徒とのコミュニケーション

完成したポスター、プレゼンテーション、レポート

等をもとに、他の班の生徒に対して、名人の仕事ぶりや生き方、考え方、技術などを伝える。その際には、共有することが可能になるような配慮や工夫が必要になる。

コミュニケーション能力のうち、とくに表現力を必要とする。また、名人の優れた点を調査し他者に伝えるには、自己主張も必要であろう。アンケート調査では、「自分の考えを言葉でうまく表現する」「自分の気持ちを表情でうまく表現する。」といった表現力と「相手に理解してもらうために、柔軟に対応して話を進める」「自分の主張を論理的に筋道を立てて説明する。」といった自己主張の能力を質問した。

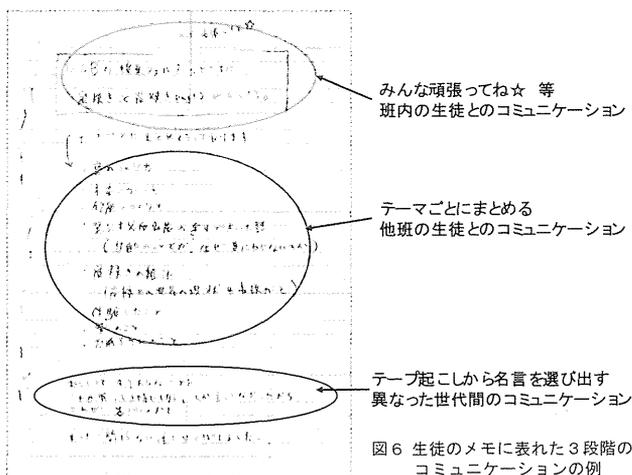
他の班の生徒とのコミュニケーションではコミュニケーション能力のうち、とくに表現力、自己主張できる能力を必要とする。

④コミュニケーションの実例

数少ない例ではあるが、2011年に実施した際のレポートに偶然紛れ込んでいた、生徒が書いたメモを参考にして、生徒が3段階のコミュニケーションをどのように意識しているのか実態をみた。

図6は、ある生徒が同じ班の生徒に対して送ったメモである。

「みんな頑張ってるね☆」の部分は、班内の生徒とのコミュニケーションを示している。次に「テーマごとにまとめる」と書いてあり、まとめ方について具体的な作業手順を示している。発表会を意識した内容であり、他班の生徒とのコミュニケーションを示している。最後に「テープ起こしから名言を選び出す」と書いてあり、名人との世代間コミュニケーションを示している。



みんな頑張ってるね☆ 等
班内の生徒とのコミュニケーション

テーマごとにまとめる
他班の生徒とのコミュニケーション

テープ起こしから名言を選び出す
異なった世代間のコミュニケーション

図6 生徒のメモに表れた3段階のコミュニケーションの例

(3)各グループのコミュニケーション能力

「異なった世代間のコミュニケーション」「同じ班の生徒とのコミュニケーション」「他の班の生徒とのコミュニケーション」の3つの段階ごとにA、C、D各グループのコミュニケーション能力について分析を

進めた。図3、図4の結果をもとに、3段階のコミュニケーションごとに、それぞれに必要な基本スキルと対人スキルに分けて相違点や変化を捉えた。

①Aグループ

聞き書きを経験したAグループは、聞き書きを経験していないBグループと比較して、次のような特徴が認められた。異なった世代間のコミュニケーションについては、他者受容は少し劣るが、解読力は特に優れている傾向が示された。同じ班の生徒とのコミュニケーションについては、自己統制力に差はないが関係調整が特に劣る。他の班の生徒とのコミュニケーションについては、表現力は優れ、自己主張は特に優れている。インタビューを通して名人の考えを発言から適切に読み取ること、名人の感情や心理状態を敏感に感じ取ることを身につけたと考えられる。レポート作成に際しては、人間関係の維持や意見の対立に苦戦し、発表に際しては調査を通して得た名人の言葉や気持ちをうまく表現し、聞き手に理解してもらうために、柔軟に対応して話を進めたり、主張を論理的に筋道を立てて説明することができたと考えられる。(表1)

表1 坂戸高校予備調査

Aグループ(坂戸高校)の特徴	とくに必要なスキル	
異なった世代間のコミュニケーション	解読力◎	他者受容X
同じ班の生徒とのコミュニケーション	自己統制力=	関係調整XX
他の班の生徒とのコミュニケーション	表現力○	自己主張◎

図2に示した、Bグループと比較して ◎とくに優れている X劣っている
○優れている XXとくに劣っている
=変化がない

②Cグループ

インドネシア・コルニタ高校の2年生は今年初めて聞き書きプログラムに参加した。NPOスタッフやコルニタ高校の教師たち、地元の関係者の支援を受けて実現にこぎ着けた。生徒たちのコミュニケーション能力はどう変化したのだろうか。事前調査は9月の事前学習時に実施した。この段階で、7段階中1.94から2.58と自己肯定感がかなり高かった。事後調査は12月の発表会終了時に実施した。事後調査では、他者受容が少し否定的な方向に変化した。調査を通して名人の意見や立場に共感したり、名人の意見をできるかぎり受け入れることや名人の意見や立場を尊重することに苦戦したことが読み取れる。また、名人の考えを発言から適切に読み取ることや名人の感情や心理状態を敏感に感じ取るといった解読力は、高いレベルで自己肯定感が維持された。ポスターやプレゼンテーションなどの発表資料作成に際し、4～5人で構成される班の生徒とのコミュニケーションでは、関係調整が少し否定的な方向に変化した。人間関係を良好な状態に維持するように心がけることや、意見が対立した場合の人間関係の対処に苦戦したと考えられる。発表に際しては、表現力、自己主張ともに高いレベルで自己肯定感が維持された。概して言えば、コルニタ高校の生徒た

ちはこの聞き書きプロジェクトに自ら志願した生徒のため、もともとこのプロジェクトへの関心が高い。また、自己肯定感も坂戸高校の生徒と比較して高く、アンケート調査の多くの項目において著しい変化は見られなかった。(表2)

表2 インドネシア・コルニタ高校生の特徴

Cグループ(コルニタ高校)	とくに必要なスキル	
異なった世代間のコミュニケーション	解読力=	他者受容↑
同じ班の生徒とのコミュニケーション	自己統制力=	関係調整↓
他の班の生徒とのコミュニケーション	表現力=	自己主張↓

図3に示した、事前アンケート調査と比較して =変化がない ↓少し下がった

③Dグループ

坂戸高校では、2年生5名が夏の聞き書き調査をもとに英語のポスターとプレゼンテーションをまとめ、発表した。1回目のアンケート(事前調査)は夏季休業中調査当日の朝、2回目(事後調査1)は日本語で作成したレポートの完成時、3回目(事後調査2)はコルニタ高校での発表会終了時に実施した。1回目と2回目を比較すると、コルニタ高校生と同様に、他者受容が少し否定的な方向に変化した。調査を通して名人の意見や立場に共感したり、名人の意見をできるかぎり受け入れることや名人の意見や立場を尊重することに苦戦したことが読み取れる。また、名人の考えを発言から適切に読み取ることや名人の感情や心理状態を敏感に感じ取るといった解読力は、他者受容と同様に否定的な方向に変化した。ポスターやプレゼンテーションなどの発表資料作成に際しても、2人で構成される班の生徒とのコミュニケーションでは、コルニタ高校生と同様に人間関係の対処に苦戦したと考えられる。発表に際して表現力は否定的に、自己主張は肯定的に変化した。(表3)

表3 坂戸高校本調査①

Dグループ5名(坂戸高校)1回目と2回目の比較	とくに必要なスキル	
異なった世代間のコミュニケーション	解読力↓	他者受容↓
同じ班の生徒とのコミュニケーション	自己統制力↓↓	関係調整↓↓
他の班の生徒とのコミュニケーション	表現力↑↑	自己主張↑↑

図5に示した、1回目のアンケート調査と比較して ↑少し上がった ↓少し下がった
↑↑大きく上がった ↓↓大きく下がった

日本語版完成時の2回目と英語での発表会終了時の3回目を比較すると、多くの要素で改善がみられた。すなわち、異なった世代間のコミュニケーションでは、他者受容と解読力がともに肯定的に変化した。同じ班の生徒とのコミュニケーションでは、自己統制力と関係調整がともに肯定的に変化した。他の班の生徒とのコミュニケーションでは、表現力は肯定的に変化し、自己主張はわずかに否定的に変化した。生徒はインドネシアに渡航し、英語で発表するというかつてない経験の中で、このような変化が生じたと考えられる。特に、英語でのコミュニケーションは普段と異なる状況の中で行われたため、緊張や苦勞が多く、英語での発表を通して、自分の意見が通じない時のもどかしさと、通じた時の達成感が表れたと言えよう。(表4)

表4 坂戸高校本調査②

Dグループ5名(坂戸高校)2回目と3回目の比較	とくに必要なスキル	
異なった世代間のコミュニケーション	解読力↑↑	他者受容↑↑
同じ班の生徒とのコミュニケーション	自己統制力↑	関係調整↑
他の班の生徒とのコミュニケーション	表現力↑↑	自己主張↑

図5に示した、2回目のアンケート調査と比較して ↑少し上がった ↓少し下がった
↑↑大きく上がった ↓↓大きく下がった

④日本とインドネシアの比較

坂戸高校5名とコルニタ高校27名で、聞き書き実施前と後のアンケート結果を比較し、T検定とanova(一元配置分散分析)を実施した。坂戸高校の標本数が少ないため、共通点を見いだすことが難しかった。表5、表6のとおり、1回目の結果を坂戸高校とコルニタ高校で比較すると、自己統制、表現力、自己主張、他者受容で差があった。同様に2回目の結果を比較すると、自己統制、表現力、自己主張で差があった。しかし、2回目では他者受容にグループによる差がなくなったのは、特記すべきことである。T検定による1回目と2回目の比較では有意差はないが、グループで比較すると差が縮まっているのであろう。この場合、他者受容は異なった世代間コミュニケーションととらえられるので、名人の調査を通して同じような変化が表れたのかもしれない。

表5 分散分析表 坂戸・コルニタ1回目の調査

	F値	有意確率
自己統制力平均A x グループ グループ間(結合)	5.154	0.031
表現力A x グループ グループ間(結合)	8.22	0.008
解読力A x グループ グループ間(結合)	3.017	0.093
自己主張A x グループ グループ間(結合)	13.867	0.001
他者受容A x グループ グループ間(結合)	14.868	0.001
関係調整A x グループ グループ間(結合)	7.029	0.013

表6 分散分析表 坂戸・コルニタ2回目の調査

	F値	有意確率
自己統制力平均B x グループ グループ間(結合)	4.877	0.035
表現力B x グループ グループ間(結合)	13.079	0.001
解読力B x グループ グループ間(結合)	1.677	0.205
自己主張B x グループ グループ間(結合)	6.902	0.013
他者受容B x グループ グループ間(結合)	2.166	0.152
関係調整B x グループ グループ間(結合)	2.264	0.143

4. おわりに

この交流に関する坂戸高校生の感想は、コルニタ高校生と仲良くなることができたこと、英語発表の準備をもっとしておけばよかったこと、植物園見学はとても楽しくいい思い出になったこと、インドネシアでは貧困に苦しむ人がいて何か自分も出来ないかと思ったこと等である。コルニタ高校生からは、「聞き書き」を楽しむことができたこと、名人はとても親切で自分も名人のようになりたいこと、日本の友人ができたこと等である。帰国してまだ数日だが、この交流を通じて生徒同士が親しくなれたとともに、地域の伝統文化への理解や環境問題の解決を考えるきっかけになってくれたと感じている。

コミュニケーション能力の測定に関する報告はここ

までである。2013年3月末に、コルニタ高校からインドネシアでの聞き書きに参加した生徒6名と教員2名が来日した。坂戸高校では、新しく建てられた多目的交流棟に2泊3日の間滞在した。かるた部による競技かるたの披露、和服に着替えてのかるた遊び、有機野菜名人が作った野菜を材料にした鍋を囲む夕食、小川町の名人を訪ね和紙づくりを体験、竹細工名人宅の訪問、小川町有機野菜レストランでの夕食会等、盛りだくさんの内容で交流を行った。ワークショップでは、聞き書きに参加した生徒たちが1年間の活動を振り返った。生徒からは、次のような感想が出された。

- ・名人には名声があるが自慢はしない。謙虚に仕事をするのが大切。
- ・人形作りに1週間かかる。忍耐が大切。
- ・名人は環境に良い竹かごを作る。だから環境のためにもこの職業はなくならないでほしい。そして竹細工を見下したりしないでほしい。
- ・忍耐が大切。神を信じる。素直であること。
- ・自転車で人を運ぶのは、とても厳しい仕事。なぜこの仕事を続けるのか。他にお金を稼ぐのが大変だからである。子どもが大学を卒業するまで、名人はこの仕事を続ける。神様を信じる。
- ・和紙の良さを改めて理解した。
- ・有機農業のメリットとデメリットがわかった。息子がアレルギーだから有機農業を始めた。
- ・竹細工について考えた。自分も竹細工を作れるようになった。

このワークショップの最後に、生徒全員で次の宣言文を完成させた。

“Everyone must have a vision and mission in their life.”

このように、初の試みとして環境教育に聞き書きに関する学習を取り入れた、坂戸高校とコルニタ高校との交流を実施した。聞き書きプロジェクトの活動を通して、両校生徒のコミュニケーション能力を調査した。実現に向けて、校内の協力、NPOとの連携、また現地ではコルニタ高校関係者、JICA青年海外協力隊員の方々にご協力いただき、無事にこの交流を実施できたことに感謝を申し上げたい。

最後に、この1年間の取り組みをまとめたポスターを添える。

主な協力者（敬称略）

NPO法人共存の森ネットワーク：吉野奈保子、森山紗也子、磯野晶子、森田真由子
(株)森里川海生業研究所：澤幡正範、鈴木さと子
ボゴール農科大学附属コルニタ高校：生徒34名、

Ir. Tri Heru Widarto, Marda Ismulyadi,
Dina Rostianah,

グヌン・グデ・パンランゴ国立公園事務所

JICA青年海外協力隊：吉田賢一

小川町の名人：加茂孝子、持田信三、横田茂

インドネシアの名人：

Mr. H. Soekarna, Mr. Surya, Mr. Ilyas, Mrs. Ecih,

Mr. Aming, Mrs. Iyom, Mr. Jatnika, Mr. Beben,

Mrs. Otih Winarsih

東海大学海洋学部：吉井萌恵（卒業生）

筑波大学附属坂戸高等学校：生徒14名、

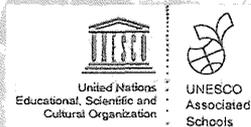
建元喜寿、奥村準子、田中友紀子

この報告は、「筑波大学学校教育論集35(2013)」へ投稿した原稿「『アジアの高校生による聞き書きプロジェクト』におけるコミュニケーション能力の測定について」(石井、菅野、江口、石隈)をもとに加筆したものである。

アジアの高校生による聞き書き



プロジェクト



1. 概要

筑波大学附属坂戸高等学校では7年前の平成17年から、生徒が森の「聞き書き甲子園」に参加している。その間、参加生徒は森や海や川の名人を聞き書きすることで名人と向き合い、名人の技や伝統に感動し、聞き書きレポートを仕上げながら充実した活動をおこなってきた。そこで21年からは、NPO法人「共存の森ネットワーク」(以下共存の森と略す)の協力を得て環境科学2年次の授業の中で、小川町での聞き書き調査を始めるに至った。学校での聞き書きを始めて、この4年間で81名の生徒が参加するとともに、4年目の平成24年は特別な年になった。海外の高校と聞き書きを通じた交流が可能になったのである。最初の交流先として、本校の姉妹校であるインドネシア・ポゴール農科大学附属コルニタ高校(以下コルニタ高校と略す)が選ばれた。

2. 6月～9月の活動(坂戸高校)

6月中旬に2日間事前学習を行った。共存の森から講師を迎え、①農村に暮らし、仕事をしている人たちのイメージを学んだ。②調査先への挨拶や取材日の設定についてアドバイスを受けた。③準備作業として、所在地、交通手段、調査時に必要な用具を確認した。④質問項目を考え整理した。⑤インタビューの仕方について練習を行った。⑥調査後の作業としてテープに録音することと書き起こすことを学び、調査に臨んだ。7月の夏期休業中に調査日を設定し、小川町における聞き書き調査を実施した。その後録音したインタビューを書き起こし、9月最初の授業で撮影した写真を選び、発表資料の作成にとりかかった。9月中旬の授業では、発表会形式で各班の調査結果を報告し、日本語での資料を整えた。

右上:有機農業の調査

左下:竹細工名人

右下:紙すき名人

7月30日埼玉県小川町にて



3. 9月の活動(インドネシア・コルニタ高校)

9月初旬、本校教員と共存の森スタッフがコルニタ高校を訪問した。日本からの一行とコルニタ高校の教員が協力し、英語版のテキストを用いてインドネシア語の通訳を交えながら、「聞き書き」に関する事前学習、現地調査、まとめ方の指導を行った。このプログラムにはコルニタ高校の2年生34名が参加した。生徒たちは、日本からの一行を歓迎し、初めて経験する「聞き書き」の授業に興味を示してくれた。調査先は、インドネシアに伝わる伝統的な衣食住(鍾製作、人形製作、人力車、農業、竹細工、石組み、伝統菓子製作など)に関する技術を持つ名人が選ばれた。各グループ生徒4～5名でインタビューを行い、その成果をまとめた。

左上:事前学習

左下:コルニタ高校生たち

右下:竹細工名人

9月6日インドネシア・ジャワ島にて



4. 12月の活動(坂戸高校とコルニタ高校の交流)

12月下旬、本校生徒5名、教員2名、共存の森スタッフ2名がインドネシアに渡航した。12月22日、国立ポゴール農科大学水産学部講堂において交流会を実施した。両国の高校生が得た地域・産業・伝統・文化等の知見をもとに、英語ポスターの展示、英語によるプレゼンテーションを行い成果を共有した。また、坂戸高校からは書道を学ぶ生徒が作品展示と毛筆の実演、コルニタ高校からは伝統音楽の演奏や伝統食の披露が行われ、文化的な交流を深めた。高校生が地域の農林業や環境保全に携わる人々への調査を通じて聞き書きを行い、地域の自然環境や伝統を見つめ、持続可能な社会、日本とインドネシア両国の未来、地球規模の環境問題を考える機会となった。交流会の翌日は両校の生徒たちが、ともにポゴール植物園を見学した。

この交流を通じて生徒同士が親しくなることができたとともに、地域の伝統文化への理解や環境問題の解決を考えるきっかけになってくれたと感じている。



左上:コルニタ高校のポスター

右上:坂戸高校のポスター

左下:書道作品の披露

12月22日 インドネシア・ポゴール農科大学にて



左上:発表会の様子

右上:植物園見学

左下:参加者の集合写真

12月22日,23日インドネシア・ポゴールにて



5. 3月の活動 (坂戸高校)

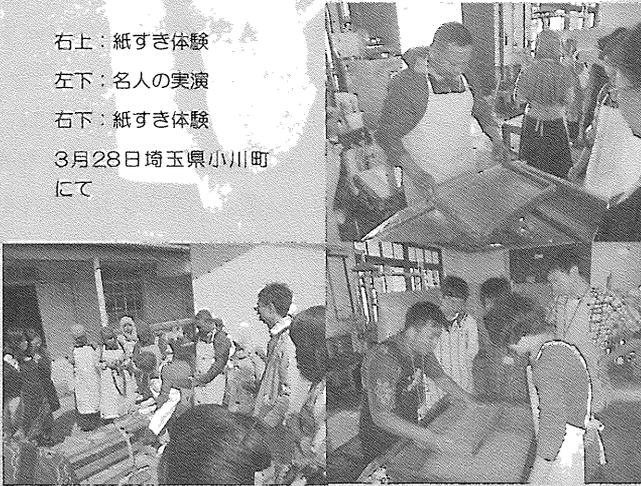
3月下旬、コルニタ高校のプロジェクト参加生徒6名、教員2名を日本に招へいた。坂戸高校からは2年次農業科科目「環境調査」選択者6名、来年度インドネシア校外学習に参加する1年次生徒8名が参加した。プロジェクトのまとめとして、坂戸高校でこの一年間の活動を振り返るとともに将来へ向けた宣言文をまとめた。小川町和紙体験学習センターでの紙すき体験、竹細工工房の見学、小川町の名人との交流会を行った。

この交流に関する坂戸高校生の感想は、コルニタ高校生と仲良くなることができたこと、英語発表の準備をもっとしておけばよかったこと、植物園見学はとても楽しい思い出になったこと、インドネシアでは貧困に苦しむ人がいて何か自分も出来ないかと思ったこと等である。

コルニタ高校生からの感想は、「聞き書き」を楽しむことができたこと、名人はとても親切で自分も名人のようになりたいこと、日本の友人ができたこと等である。

この交流を通じて生徒同士が親しくなれたとともに、地域の伝統文化への理解や環境問題の解決を考えるきっかけになってくれたと感じている。

右上：紙すき体験
左下：名人の実演
右下：紙すき体験
3月28日埼玉県小川町にて



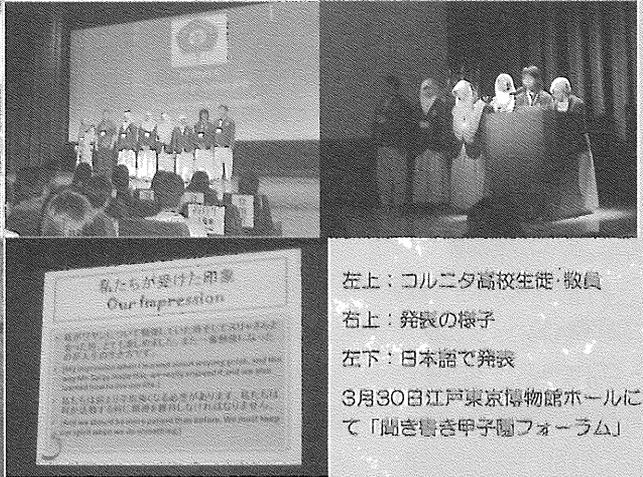
【宣言文】

“Everyone must have a vision and mission in their life.”

6. 3月の活動 (聞き書き甲子園)

3月27日～28日の坂戸高校での交流に引き続き、29日からは東京都内で「聞き書き甲子園フォーラム」が開催され、コルニタ高校の生徒と坂戸高校の生徒が参加した。

コルニタ高校の生徒がインドネシアでの聞き書きの様子を日本語で発表した。世界の様々な地域で取り組むことができる手法である聞き書きが、海を越えて海外に広がる最初の年となっ



左上：コルニタ高校生徒・教員
右上：発表の様子
左下：日本語で発表
3月30日江戸東京博物館ホールにて「聞き書き甲子園フォーラム」

右上：坂戸高校多目的交流棟にて
左下：宣言文作成
右下：小川町和紙体験学習センター
3月27日,28日
坂戸高校,埼玉県小川町にて

